
東方幽歌桜

東方サイコー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幽歌桜

【Nコード】

N3669W

【作者名】

東方サイコー

【あらすじ】

幻想郷を舞台に起こり始める新たな異変のお話です。作者の勝手な表現や、オリジナルキャラが含まれています。

異変の始まり（前書き）

多くの方々の小説を読んで自分も東方の小説が書きたくなくなってきました。たくさんの方に見てもらえるところ嬉しいです。また「こんな風にする」といい「というアドバイスもいただけるところ嬉しいです。

異変の始まり

ここは現実と幻想の境界に存在する幻想郷。
その幻想郷にも春が訪れていました。

春の清らかでどこか寂しさのある風が吹き抜ける幻想郷その幻想郷に存在する神社『博麗神社』その神社の巫女博麗 霊夢は気がついてなかったが少しずつ異変が起こり始めていた……。

『紅魔館』

霧の湖の畔に建つ悪魔の館の庭先でもその異変が起こり始めていた。

フラン「ねえー。お姉さま。」

レミリア「何かしら?」

フランこと『フランドール・スカーレット』とレミリアこと『レミリア・スカーレット』は、姉妹である。(東方知ってる方は、「あれ……なんでフラン外でてるの?」と思う方がいると思うが気にしないでもらいたい)二人の種族は『吸血鬼』である。レミリアの能力は「運命を操る程度の能力」フランは「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」である。

フラン「今年の桜何か変じゃないかしら?」

レミリア「そうかしら?」

フラン「なんというか……桜から『妬み』『苦しみ』を感じるのよねー」

レミリア「そうかしら?」

お姉さまは本当に気が付いていないのかしら?それとも……その時後ろの扉が開きメイドの咲夜が入ってきた。

咲夜「お嬢様、紅茶をお持ちいたしましたわ」

レミリア「あら、ありがとう」

フラン「あ、咲夜」

咲夜は、持ってきた紅茶をならべた。そこで咲夜に聞いてみることにした。

フラン「ねえ、咲夜」

咲夜「どうされました？」

フラン「今年の桜少し変じゃない？」

咲夜「確かに、少し変な感じがしますわ」

フラン「やっぱり咲夜も感じたのね」

そう言い終わったときにレミリアは紅茶を飲み終わり、立ち上がってから

レミリア「一回パチエのところに行ってみましょう」

続く

異変の始まり（後書き）

どうでしたでしょうか？はいKSですよねW

ヴォワル大魔法図書館（前書き）

はい第2話です。では、どうぞ。

ヴォワル大魔法図書館

紅魔館地下ヴォワル大魔法図書館

レミリア「パチエー。いるかしら？」

咲夜「いないことは、ないと思いますよ？」

？「ここよ、ここ」

フラン「あ、パチエ」

パチユリー「ここは、私の図書館。いない訳ないじゃない」

そう、この声の主パチユリー・ノーレッジは、レミリア・スカレットと昔からの仲である魔法使いである。

レミリア「この二人が桜が変だって言ってるのよ私もそう思うけどパチエはどうかしら？」

パチユリー「私もそう感じるは、それに、怪しいのがそこにいるじゃない」

咲夜&フラン「え？」

？「ばれていましたか」

レミリア・フラン・咲夜「あ！あなたは」

パチユリー「そんな、こそこそしてたらばれないものもばれるわよ」

妖夢「みなさん、私も幽々子様も今回の異変には、何にもかかわっていませんよ」

レミリア・フラン・咲夜・パチユリー「え！？」

そう、このとき紅魔館の面々は、桜から「妬み」などを感じたことからどうせ幽々子こと西行寺 幽々子や、妖夢こと魂魄 妖夢が幽霊たちを使って異変を起こそうとしているものとはかり思っていたからだ。しかし、当の妖夢は、違うと否定してきたのだ。

妖夢「ところで、どうしてばれたのですか？」

妖夢は、質問してきた。パチユリーは、

パチユリー「あんたの半霊の方の一番下？のつんつんが本棚の角

から見えてたのよ」

パチユリーは、「当たり前でしょう？」と言いたげにため息をついた。当の妖夢は、「なるほど」とポン！と手を打った。

そうすると本棚の影からスウ〜という感じに表れた者がいた。

？「もう。妖夢ったらばれないようにて言ったでしょう！」

妖夢「あ！

す・すいません幽々子様」

妖夢が誤った者こそ妖夢が庭師としてお仕えする白玉楼の主である西行寺 幽々子である。亡霊である幽々子は、本当にスウ〜という感じで現れたのである。

幽々子「まあ、いいわまた次があるもの、ね？」

妖夢「はい！ありがとうございます。」

パチユリー「人の図書館にまた忍び込むようなこと言ってるけど、これつきりにして」

とパチユリーは、言い放つ。すると、

幽々子「あらあら」

と言いながら口元を扇子で隠しながらコロコロと笑う。

レミリア「ところで、普通のようにここにいるけど家の門番は、どうしたのかしら？」

すると幽々子は、

幽々子「あらあら、私は亡霊よ。門番の目をかいくぐって入り込むのは簡単よ」

妖夢「私の場合は、話をしていたら他の妖怪が来てその妖怪と話しているうちに・・・」

レミリアと咲夜は、「飽きた〜」と叫びだしそうな様で頭を抱えていた。

すると、本棚の一つ向こうから小悪魔と、紅 美鈴の声が聞こえてくる。声は、だんだん近くなり二人は、ひょっこり本棚の影から現れた。

小悪魔「パチユリー様お茶をお持ちしました」

と小悪魔は、まだ温かい紅茶の入っているであろうティーカップをお盆に乗せてやってきた。

美鈴「今日は、珍しい方々が訪ねて…」

そこまで言う和美鈴は、なぜかそこにいるその二人が気になった。レミリア・咲夜「その方々とは、こちらの二人？」

美鈴は、直感で二人が怒っていることを悟った。そのあとは、言わずと分かる「お仕置きタイム」の時間だった。レミリアが美鈴に弾幕をこれでもかというほど放ち昨夜がナイフを投げる。時々「いやーお助けー」と聞こえるがもちろんa11無視である。フランは、「きゃははは」と楽しそうに笑っている。そしてパチュリィは、心配そうな目でこういった。

パチュリィ「本、散らかさないでね」

どうやら、パチュリィの心配の目は、美鈴ではなく本に向けられたものだったらしい。

ヴォワル大魔法図書館（後書き）

どうでしたでしょうか？ご注意や、ご指導よろしくお願ひします。

博霊神社へ出発（前書き）

また見てくださった方ご感想などもらえるとても喜びます。
どうかよろしくお願いします。

博霊神社へ出発

あれから数刻後。図書館の台の周りに全員は、集まっていた。

レミリア「さて、これからどうしたものかしらね？」

フラン「はい。はい。はい！」

レミリア「うるさいはね、じゃあフラン何？」

美鈴「妹様、何かいい案がありませんか？」

一同がフランの意見を聞こうとフランを見る。

フラン「簡単なことじゃない？元凶を見つけ出してつぶせばいいことじゃない？」

フランは、笑いながら言う。

パチュリー「確かにそうだけど、その元凶が分からないのが今の状況でしょ？」

フラン「うゝ、でも確かに・・・じゃあ紅白か、魔理沙に聞いてみるのは、どう？」

幽々子「いい案だと思うけど、無駄だと思うはよ？」

幽々子がそう言うのと隣の妖夢も頷く。

咲夜「それは、どうしてですか？」

咲夜は尋ねる。幽々子は、妖夢に「説明してあげなさい」と耳打ちし、妖夢はコクリと頷くと説明し始めた。

妖夢「えっと、無駄というのは、先ほど私たちは、博霊神社に行ってきたのですが、霊夢も魔理沙も異変にまったく築いていないようでしたから。」

妖夢は、飽きたたという様子でため息混じりに説明した。

フラン「なら、私たち全員で行って異変を教えればどう？」

レミリア「ダメもとでも今は、それしかできそうにないはね。行きましよう。」

レミリアがそういうと全員が頷いた。こうして一行は、博霊神社へと向かうのであった。

博霊神社へ出発（後書き）

今回短いです。サーセンORZ^^^不定期で更新していこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3669w/>

東方幽歌桜

2011年10月9日15時59分発行